

なぜキェルケゴールは『完結の全集』のアイデアを
断念したのか、あるいは、『死に至る病』の出版に
こめられた意味
—NB6からNB11を読む—

鈴木 祐丞

序

キェルケゴールは、1848年12月上旬ころ、『完結の全集』(Fuldendelsens samtlige Værker) のアイデアを得た*1。詳細は後述するが、それは、「死に至る病」や「キリスト教の修練」など彼がおもに1848年に執筆した作品をひとまとめにした『完結の全集』という本を、偽名ではなく本名で出版し、それを最後に著作活動から手を引くというアイデアであった。だが彼は、1849年6月下旬ころまでに、結局そのアイデアを断念した。彼は、同年6月29日、『死に至る病』を単体で出版するためにその原稿を印刷所に送り*2、その数日後には、『完結の全集』のアイデアは「絶望的」「悪魔的」であったと日記に書きつけたのである*3。

本稿では、なぜキェルケゴールは『完結の全集』のアイデアを断念したのか、彼の日記(NB6からNB11*4)をおもな資料として考察する。

『完結の全集』のアイデアに言及する先行研究は存在するが*5、なぜキェルケゴールがそのアイデアを断念したのかを解明した先行研究は、筆者の知りうる

*1 SKS 21, 151-152, NB8:15.

*2 SKS 22, 126, NB11:203.

*3 SKS 22, 131, NB11:211.

*4 時期的に言えば、本稿のおもな研究対象は、1848年7月16日(NB6を書き始めた日)から、1849年7月18日ころ(NB11を書き終えた日)までである。

*5 例えば、大谷愛人『キェルケゴール著作活動の研究(後篇)』(勁草書房、1991年)1500-1501頁、榊田啓三郎訳・注『死にいたる病』(ちくま学芸文庫、1996年(初出は1963年))382-402頁。

かぎりでは存在しておらず*6、その解明を行うところに本稿の第一の意義がある。同時に、本稿がその解明によりもたらす知見は、『死に至る病』の出版にこめられた、おそらくこれまで知られてこなかった意味を浮かび上がらせることにもなり、ここに本稿の第二の意義がある*7。なお、本稿の研究は、筆者がこれまで進めてきた、日記を研究対象の中心に据えて、日記との関係で著作を考察するというケルケゴール研究*8の、成果の一部である*9。

以下では、まず、『完結の全集』のアイデアの全体を概観し、それについておおよその理解を得ることから始めたい。その上で、なぜケルケゴールがそのアイデアを断念したのかという問題に焦点を絞り、考察を行いたい。

*6 大谷愛人によれば、ケルケゴールが『完結の全集』のアイデアを断念したのは「深い内面的理由とそれに相即する思想的変化の理由」からであるが、大谷は、「この問題は余りに大きく、その解明にはそれだけで大作業を必要とする」と考え、その解明に着手しない（大谷愛人、前掲書、1551頁）。梶田啓三郎はその解明を試みてはいるものの、不十分に終わっていると思われる。梶田によれば、ケルケゴールが『完結の全集』のアイデアを断念した理由は、おもに、彼が、その出版により糊口の道（牧師としての職の可能性）が断たれてしまうことを心配したこと、「使徒のような口ぶりでキリスト教界にキリスト教を導入しようとする試み」することを「越権であり、不遜であり、冒瀆でさえある」と考えたことによる（梶田啓三郎訳・注、前掲書、同頁）。本稿の論述から分かるように、それらは、たしかに理由の一部ではあるが理由のすべてではないし、さらには本質的な理由であるわけでもない。

*7 本稿最終段落を参照のこと。

*8 言いかえれば、「懺悔者」（en Poeniterende）（SKS 21, 248, NB9:78 et al.）の側面についての理解を中心に据えて、ケルケゴールという思想家の全貌を捉えようという研究である。

*9 この研究方法論についての詳細は、拙編訳『ケルケゴールの日記 哲学と信仰のあいだ』（講談社、2016年）241-254頁、および拙著「ケルケゴールの思想の研究において、日記を資料として活用することの必要性について」（『哲学・思想論叢』第34号、2016年、1-14頁）参照。なお、ガルフ（Joakim Garff）の考えでは、フィクションが混入するなどしている日記よりもむしろ著作の中にこそ、実際に近いケルケゴールの姿が描き出されている（ヨーキム・ガルフ（拙訳）『「私は何を見つけたのか？ 私の「私」ではなかった』——ケルケゴールの日記と、仮名の自伝著述について』、『新ケルケゴール研究』第15号、2017年、66-87頁）。この考えに従うならば、ケルケゴールの懺悔者の側面を捉えるための最重要な資料は彼の著作ということになる。筆者の考えでは、ケルケゴールの日記のフィクション性は事実のなつ造というよりも事実の脚色という類のものであるし（拙著「日記における信仰をめぐる思索のフィクション性について」、『新ケルケゴール研究』第14号、2016年、39-50頁）、そうした日記のフィクション性は、彼が後世の読者の目を意識して自らの生を作品化しようとしてとった措置であると考えられることから（拙編訳『ケルケゴールの日記』250-252頁）、日記こそが懺悔者の側面を捉えるための最重要な資料である。

1 『完結の全集』のアイデア

それではまず、『完結の全集』のアイデアの全体を概観しよう。それがどのような経緯で得られた、どのようなアイデアであるか、そしてそのアイデアが結局どうなったか、おもに日記を手がかりにして確認したい。

(1) 『完結の全集』着想に至るまでの経緯

1848年4月上旬ころから7月中旬ころまでに、筆者が「1848年の宗教的転機」と呼ぶ出来事*10を経験し、その結果、信仰の確信（自己への無限の関心としての信仰*11）と今後の著作活動の決意（キリスト教の改正の試み*12）を得たキェルケゴールは、その後同年12月上旬ころまでのあいだ、キリスト教の改正の試みに乗り出すというその決意を実行に移すべく、着々と準備を整える。この時期の日記（NB6からNB8）からは、例えば以下のようなことを確認できる。

キェルケゴールは、『あれか、これか』（1843年2月出版）以来のこれまでの著作活動、すなわち前期著作活動の幕引きを図る。この意図は二つの形をとって現れる。一つは、前期著作活動に一貫性を持たせた上でそれを完結させようとする行為である。キェルケゴールは、美的著作と宗教的著作の二重性という助産術的な仕組みを持つ著作活動を、『あれか、これか』以来展開してきた。ただここ数年は、『愛のわざ』（1847年9月出版）や『キリスト教的講話』（1848年4月出版）など、宗教的著作の出版が続いていた。そこでキェルケゴールは、前期著作活動が美的著作と宗教的著作の二重性という助産術的な仕組みを一貫して保持したまま完結したことを明示するために、美的著作である「危機および一女優の生涯における一つの危機」を、1848年7月24日から27日にかけて、『祖国』紙上に連載するのである*13。前期著作活動の幕引きの意図は、もう一つ、前期著作活動の全体像の説明に関する思考と行為としても現れる。キェルケゴールは、前期著作活動には上述のような仕組みがあることを、ほとんど誰

*10 拙編訳『キェルケゴールの日記』参照。

*11 SKS 20, 382, NB5:30.

*12 SKS 20, 401, NB5:69.

*13 SKS 21, 21 ff., NB6:23, 27, 29 et al.

にも理解してもらえていないことを自覚していた*¹⁴。彼は、それについて人々に一定の理解を持ってもらうことを望み*¹⁵、例えば知人であるニールセン (Rasmus Nielsen, 1809-84) をその説明の伝道者に仕立て上げようと画策する。だがそれがうまくゆかないことが分かると*¹⁶、彼は前期著作活動の全体像を概説する書「わが著作活動の視点」の執筆を思いつき*¹⁷、1848年10月上旬ころにそれを書き上げるのである*¹⁸。

こうした前期著作活動の幕引きのための思考や行為と並行して、キェルケゴールはまた、今後の著作活動、すなわち後期著作活動について様々な観点から思いを巡らし、自分がこれから進むべき道筋を見定める。例えば、彼は、後期著作活動の内実について吟味し、それが「キリスト教の決定的な提示」*¹⁹であり彼にとって「最後の歩み」*²⁰となること、それが「理想性を前面化させる仕事」*²¹であり「キリスト者という範疇の条件を厳しくする」*²²のものであることなどを確認している*²³。彼は、後期著作活動に関してはその全体像を説明しておくべきかどうかについても考え、その説明となる書「武装せる中立」*²⁴を

*¹⁴ SKS 21, 19, NB6:19.

*¹⁵ SKS 21, 51-53, NB6:70 et al.

*¹⁶ SKS 21, 58 ff., NB6:76, 78 et al.

*¹⁷ SKS 21, 83, NB7:13.

*¹⁸ SKS 21, 94, NB7:36. なお、キェルケゴールは結局「視点」を生前には出版せず、それは彼の死後 1859 年に出版された。生前に出版できなかった理由は 1849 年 4 月ころの日記に読み取れる——「否、まったく正しい。私については一語も言われてはならない。とくに自分の文学的活動について、それがまるで自分のアイデアであり自分の意図であったかのように、責任を負おうとするようなことは。……私は沈黙を保たなくてはならない。とくに、決定的な瞬間に私が宗教的な著作家として続けると決意をするのなら……それが非真実になってしまうだろう」(SKS 21, 359, NB10:192)。

*¹⁹ SKS 21, 27, NB6:28.

*²⁰ SKS 21, 27, NB6:29.

*²¹ SKS 21, 162, NB8:38.

*²² Ibid.

*²³ SKS 21, 158, NB8:32 et al. また、これと表裏一体のこととして、キェルケゴールはこの時期の日記に、そうした理想性を忘却している (ように彼には思われた) 国教会などについての辛辣な批判を多数書きこんでいる (SKS 21, 64-65, NB6:86 et al.)。

*²⁴ 「武装せる中立」(Pap. X 5 B 106-109, s. 287-302 / 「武装せる中立」(『キェルケゴールの講話・遺稿集』第 8 巻、大谷愛人訳、1980 年、265-306 頁) は、もともとは「私が何を言い、何を意図しているかなどについて、同時代人のたちに、明確で疑問

(どのように) 出版すべきか検討している*²⁵。それとともに、彼は、「死に至る病」(1848年5月中旬ころまでに完成)や「キリスト教の修練」(を構成する三部の論述*²⁶) (1848年12月ころまでに完成)をはじめとする「本質的に決定的なもの」*²⁷、すなわち後期著作活動の中核となる著作をどのような形で出版するのがよいかという問題にも向き合うようになる*²⁸。この思考の中で彼が1848年12月上旬ころに得たのが、『完結の全集』のアイデアなのである*²⁹。

の余地のない説明を与えるため」(SKS 21, 44, NB6:61) に、定期刊行物として、1848年中に書かれた(KJN 12, 542)。

*²⁵ SKS 21, 44-45, NB6:61. なお、キェルケゴールは「武装せる中立」を後述の『完結の全集』に組み込んで出版するという計画を立てたが(SKS 21, 151-152, NB8:15)、この計画は最終的に頓挫し(SKS 22, 131, NB11:211 など参照)、「武装せる中立」が日の目を見たのは最初の遺稿集(*Af S. Kierkegaards Efterladte Papirer*, udg. af H. P. Barfod og H. Gottsched, bd. I-IX, København: C. A. Reitzels Forlag 1869-1881)においてだった。

*²⁶ 1848年4月ころに書かれたと考えられる「労苦する者、重荷を負う者はすべて、来たれ。わたしはきみたちを休ませてあげよう」(『キリスト教の修練』第一部となる)と、同年8月ころに書かれたと考えられる「わたしに躓かぬ者は、さいわいである」(同第二部となる)、同年11月ころに書かれたと考えられる「かれは高きところから、すべての人をみもとに引きよせたもう」(同第三部となる)のこと。

*²⁷ SKS 21, 56, NB6:74.

*²⁸ SKS 21, 47-48, NB6:64 et al.

*²⁹ SKS 21, 151-152, NB8:15. 参考までに全文を以下に訳出しておく。

最新の四冊の本(死に至る病、わたしのもとに来なさい、つまづかないひとは幸いである、武装せる中立)は、つぎのタイトルのもとに一つの本として出版するのが、もっとも適切なのではないだろうか。

完結の

全集。[Fuldendelsens samtlige Værker.]^[a]

死へ向かう病(Sygdommen efter Døden) [(筆者注) 死に至る病(Sygdommen til Døden)のことと思われる]がまず第一部として来るようにしようか。第二部は「キリスト教界へのキリスト教導入の『試み』」と呼ぶようにし、そのページの下部には「詩的に——権能なしに」と。ここにあの二つ——私のもとに来なさい、躓かない者は幸いである——を入れることにしようか。ここにはひよっとしたら三つ目の部分、私がいま書いているもの^bを入れてもいいのかもしれない。だがその場合、第一講話は、並列的ではない、ある種の導入のようなものになくてはいけないかもしれない。

それでおしまいということにしよう。

^[a] おそらくむしろ、成就の全集とし、四つ折り版にするのがいいのではないか。

^b 「彼は高いところから、すべての人を自分のもとへ引き寄せられる」。

『完結の全集』のアイデアの中身については次節でまとめるが、ひとまず着想までの経緯という観点から捉えれば、『完結の全集』のアイデアとは、1848年の宗教的転機を経たケルケゴールが得た、キリスト教の改正の試みである後期著作活動についての一構想ということである。

(2) 『完結の全集』のアイデアとはどのようなものか

上述のようにケルケゴールは1848年12月上旬ころに『完結の全集』のアイデアを得たのであったが、彼はその後しばらくそのアイデアを練り直し続ける^{*30}。そして彼は、1849年4月ころ^{*31}に、次のような草稿^{*32}を作成するのであり、それが『完結の全集』のアイデアの最終的な形であると思われる。

これら三つ——私のもとに来なさい、躓かない者は幸いである、高いところから——は、「キリスト教界にキリスト教を導入する試み」というタイトルページ(その下部には「詩的な試み——権能なしに」)をそれぞれ持つようにさせよう。

*30 正確に言えば、ケルケゴールは、この時期、当初は「死に至る病」「キリスト教の修練」「武装せる中立」から構成される『完結の全書』の出版の可能性について検討していたのだが(SKS 21, 151-152, NB8:15)、次第にそこに「わが著作活動の視点」などを組み込むべきか否かを考えるようになり、さらにはそれと並行して、『完結の全書』のアイデアは棚上げし、それぞれの作品を(いついかにして)出版すべきかなどについても考えるようになる(NB9:56, 78, NB10:4, 6, 19, 38, 69, 79, 102, 141, 169 et al.)。要するに、ケルケゴールはこの時期、後期著作活動へ向けて、手元にある作品をいつどのように出版するのが一番よいのかを考え続けるのであり、『完結の全集』のアイデアはその思考の中で形をとっていた一つの可能性だということである。

*31 この草稿には執筆日が書かれておらず、それがいつ書かれたかは推測するしかないのだが、以下の理由からおそらく1849年4月ころと考えられる。この草稿には「一つの覚書」が『完結の全集』の一部をなすものとして挙げられていることから、この草稿が書かれた段階で「一つの覚書」がすでに書き上げられていたことが推測される。「一つの覚書」は日記では「清算」(Regnskabet)とも呼ばれており(SKS 22, 36, NB11:53, KJN 6, 463 参照)。「清算」は最終的に『我が著作家=活動について』(1851年8月出版)に組み入れられる(KJN 5, 555 参照)。そして『我が著作家=活動について』の「清算」には、「コペンハーゲン 1849年3月」と記されている(SKS 13, 11 / 『我が著作家=活動について』(『ケルケゴール著作全集』第14巻、大谷長訳、創言社、1988年)517頁)。

*32 Pap. X 5 B 142-143 (一部省略)。

完結の全集
1848年の成果

百合が花開こうかという瞬間がやってきて、環境がきわめて厳しいということが分かっているとしても——従順な百合は、ただ一つのことだけを理解している。「今がその瞬間だ」と。S. K. の1849年の三つの敬虔な講話*³³参照。

S. キェルケゴール著

第一巻

「死に至る病」

第二巻

(ここに補遺、「武装せる中立」*³⁴)

キリスト教の修練

一つの試み*³⁵

第一部

みな私のもとに来なさい

第二部

躓かない者は幸い

第三部

彼は高いところから、すべての人を自分のもとへ引き寄せられる

*³³ 『野の百合と空の鳥 三つの敬虔な講話』を指す。

*³⁴ 「武装せる中立」については、注 24、25 参照。

*³⁵ 『完結の全集』のアイデアの着想時の日記 (SKS 21, 151-152, NB8:15) を手がかりにすると、この「一つの試み」とは、「キリスト教界へのキリスト教導入の試み」の意味であると推察できる。

第三卷

私の著作家の活動について

一 視点

(注 やはり難しいかもしれない。だが第一部^{*36}は用いてもいいかもしれない。その場合でも一番にはせず、三つの覚書と一つの覚書を前に出そう)

二 三つの覚書^{*37}

三 一つの覚書^{*38}

(四 すべてを一語で^{*39})

*³⁶ 「第一部」の原語は“1ste Afdeling”である。『わが著作活動の視点』には「第一部」ではなく「第一篇」(Første Afsnit)が存在するが、おそらく両者は同一であると思われる。

*³⁷ キェルケゴールの日記の新版英訳(*Kierkegaard's Journals and Notebooks*)の注(*KJN* 6, 463-464)によれば、「三つの覚書」は以下の(1)から(3)より成る。

(1) 「献呈辞『かの単独者』について」(1846年執筆)(*Pap.* IX B 63,4-5, s. 350-357)。なお、これはキェルケゴールの死後に『わが著作活動の視点』の「付録」の一部として出版された(*SKS* 16, 85-93 / 『わが著作活動の視点』(『キェルケゴール著作集』第18巻、田淵義三郎訳、1963年)134-146頁)。

(2) 「私の著作活動と『単独者』との関係についてひと言」(1847年執筆)(*Pap.* IX B 63, 6-13, s. 357-374)。なお、これはキェルケゴールの死後に『わが著作活動の視点』の「付録」の一部として出版された(*SKS* 16, 93-104 / 『わが著作活動の視点』146-164頁)。

(3) 「『金曜日の講話』の序文」(1847年執筆)(*Pap.* IX B 63,14, s. 375-377)。なお、キェルケゴールはこれを『金曜日の聖餐式における二つの講話』(1851年出版)の「序文」として用いた(*SKS* 12, 281 / 『金曜日の聖餐式における二つの講話』(『キェルケゴールの講話・遺稿集』第7巻、小林茂訳、新地書房)182-184頁)。

*³⁸ 前注に同じく新版英訳の注(*KJN* 6, 463)によれば、「一つの覚書」は「清算」とも呼ばれており、キェルケゴールはこれを『我が著作家=活動について』(1851年出版)の一部として用いた(*SKS* 13, 11-17 / 『我が著作家=活動について』515-517頁)。

*³⁹ *Pap.* X 5 B 144 の内容を指す。下記に訳出しておく。

最後に、次のタイトルの覚書を。

すべてを一語で

創作品は最初から最後まで宗教的な、キリスト教的宗教的な発展であった。あるいは、宗教性へ向けての、キリスト教的宗教性へ向けての発展であった。

私の創作品はある意味では私の意図によるとも言える。別の意味ではそれは、私自身の発展であり建徳である。その全体は私の意図によるのか、それとも摂理

上掲の草稿を手がかりに、この時期の日記の内容も踏まえつつまとめると、『完結の全集』のアイデアとは、①総体的な内容を持つ『完結の全集』という本を、②偽名ではなく本名で出版し、③その出版を最後に著作活動から手を引く、という考えである。これら三つの要点についてそれぞれ簡潔に解説しておきたい。

① 内容の総体性

上掲の草稿から知られることの一つは、キェルケゴールが、『完結の全集』の出版によって、自らの著作活動を総体的に提示しようとしていることである。つまり、『完結の全集』の出版によって、(a) 彼の後期著作活動の全体像、(b) 彼の前期著作活動の方法論、(c) 前期・後期を通じた彼の著作活動の深層構造が、提示されることになるだろう。

(a) キェルケゴールの後期著作活動は理想性の前面化をその中心的内容とし^{*40}、それは人々を正しく恩寵にあずからせることを目的とする^{*41}。『完結の全集』第一巻「死に至る病」と第二巻「キリスト教の修練」で理想性の前面化が行われる。そして第二巻の補遺として「武装せる中立」が存在することにより、こうした後期著作活動の枠組みが説明されるとともに、そこにおける著作

によるのかと、板挟みになったとするなら、私は迷うことなくその後者だと言おう。

同時代の人たちとの関係では、私は自分のことを作家と呼ぶが、教師とか建徳者とは呼ばない。むしろ学ぶ者と呼ぼう。私自身が建徳されてきた者なのである。

同時代の人のうち、誰一人として、その人がキリスト者であるかどうかという点で、私から攻撃を受けた者はいない。それは、私がそうすることに気乗りしないからというよりは、そのようなことを私を私は正当化できないからである。私はやはり、実存的に、本質的に詩人である。そして私が自分について最初の瞬間から言い続けているのは、権能なしに、ということなのである。

……私が言ってきたことの多くは、多くの著作は、宗教性の刷新へのちょっとした貢献なのである。つまり、単独者における内面性、ということである。(他方で、私が詩人とは違う点もあって、それは、私がこの実存の欺瞞に気づいてきたということである。)

^{*40} SKS 21, 162, NB8:38 et al.

^{*41} SKS 12, 15 / 『キリスト教の修練』(『キェルケゴール著作集』第 21 巻、杉山好訳、1963 年) 13 頁。

家キェルケゴールの立ち位置（武装せる中立）が示されることになる。

(b) 『完結の全集』第三巻の「視点」のおもに第一部（『視点』の第一篇）および「一つの覚書」によって、前期著作活動における諸著作の弁証法的構造や間接的伝達という方法が説明されることになる。

(c) 『完結の全集』第三巻の「視点」のおもに第二部（『視点』の第二篇）によって、キェルケゴールが懺悔者（en Poeniterende）であること^{*42}、彼の著作活動が懺悔者のつぐないであり^{*43}自己否定であること^{*44}、彼の著作活動は摂理の導きであり^{*45}彼は任務（Pligt-Arbeide）を遂行したこと^{*46}が示されることになる。また、「三つの覚書」によって、彼の著作活動が単独者に向けられてきたことが示されることになる。

② 本名による出版

上掲の草稿からは、キェルケゴールが、上述のような内容を持つ『完結の全集』を、偽名の著者をあてがうことなく、本名（「S. キェルケゴール」）で出版するつもりであることが知られる。

③ 著作活動から手を引くこと

（上掲の草稿からは読み取れないが）この時期の日記からは、彼が『完結の全集』の出版を最後に著作活動から手を引くことを考えていることが知られる。例えば1849年1月末ころの日記には次のようにある^{*47}。

^{*42} SKS 16, 43 / 『わが著作活動の視点』66頁。

^{*43} SKS 16, 12 / 『わが著作活動の視点』14頁。

^{*44} SKS 16, 26-27 / 『わが著作活動の視点』38頁。

^{*45} SKS 16, 56-57 / 『わが著作活動の視点』91頁。

^{*46} SKS 16, 54 / 『わが著作活動の視点』86頁。邦訳（田淵訳）では“Pligt-Arbeide”が「請負仕事」となっているが、「任務」くらいが適訳であるように思われる。

^{*47} キェルケゴールが『完結の全集』の出版を最後に著作活動から手を引くことを考えていたことを示す例としては、他にも、例えば1849年10月下旬の日記の言葉「私の考えは、完成している原稿の一つの本で、すべて私の名前によって出版することだった——そしてすっかり手を引くことだった」（SKS 22, 321, NB13:78）などがあげられる。さらに言えば、キェルケゴールが『完結の全集』というタイトルについて、『成就の全集』とした方がよいのではないかと考えていた（SKS 21, 151, NB8:15）ことにも、そのことが読み取れるかもしれない。

完結の全集、に

ごく簡潔な序文を書くのがいいのではないだろうか。

大臣が辞任をして私人となるように、私は作家であることをやめ、ペンをおこう——私は本当に、職務というものに携わってきたのだ。

さらにもう一言。いや、これ以上は一語も。私はもうペンをおいたのだ。

(3) 『完結の全集』のアイデアの結末

キェルケゴールは、『完結の全集』のアイデアを得た1848年12月上旬ころ以降、そのアイデアを練り直し続けながら、並行して、そのアイデア自体の妥当性についても考え続ける。つまり、『完結の全集』のアイデアは練り直しの末に上掲の草稿（1849年4月ころ）に記されたような構想へと行き着くのであるが、キェルケゴールは、その思考の裏で、はたしてそのような『完結の全集』のアイデアを実行に移すことなど本当に可能なかどうか、もし不可能であるならばどの作品をどのように出版するのがよいか、考え続けるのである^{*48}。

『完結の全集』のアイデアの妥当性をめぐる彼の思考の要点は次章でまとめるが、ひとまずここではその結末だけを確認しておきたい。キェルケゴールは、1849年6月29日、『死に至る病』を単体で出版するためにその原稿を印刷所に送るのである^{*49}。そして7月上旬ころの日記に、『完結の全集』のアイデアの妥当性について、次のような結論を書いている。

私の著作活動についてのものもふくめて、すべてを一つの本として出版しようという考えの全体——私は以前、この考えをすでに完全に断念したのではあるが——は、やはり、絶望的な考えであり、悪魔的な考えでもあった。^{*50}

^{*48} この時期の日記にはその問いにかかわる記述が数多く見出される。数例をあげれば、NB11:105, 123, 125, 132, 194, 195, 200, 202 などである。

^{*49} SKS 22, 126, NB11:203.

^{*50} SKS 22, 131, NB11:211.

すなわち、キェルケゴールは、1849年6月下旬ころまでに、それまで半年ほど抱き続けてきた『完結の全集』のアイデアについて、妥当ではないとして断念したのであり、それと表裏一体のこととして、ひとまず『死に至る病』を出版することにしたのである。

2 なぜキェルケゴールは『完結の全集』のアイデアを断念したのか

ここまで、『完結の全集』のアイデアについて概観してきた。それがどのような経緯で得られた、どのようなアイデアであるか、そしてそのアイデアが結局どうなったかを確認した。

それでは、なぜキェルケゴールは『完結の全集』のアイデアを断念したのか、その問題に焦点を絞って考察しよう。彼が『完結の全集』のアイデアの妥当性をめぐって思考を続けた時期（1848年12月上旬ころから1849年7月上旬ころまで）の日記（NB8からNB11）を読むと、キェルケゴールが、先述の『完結の全集』のアイデアの三つの要点のそれぞれに困難を覚えるようになったことが理解されてくるのである。その事情を以下にまとめてみたい。

(1) 内容の総体性に関して

キェルケゴールは、『完結の全集』の出版によって、自らの著作活動を総体的に提示しようとしていたのだった。キェルケゴールは、とりわけ、『完結の全集』の「第三巻 私の著作家の活動について」の部分の出版を問題視するようになるのである。

繰り返しになるが、『完結の全集』第一巻は「死に至る病」、第二巻は「キリスト教の修練」であり、第三巻「私の著作家の活動について」は「視点」および「三つの覚書」「一つの覚書」などから構成されるはずであった。それゆえ第三巻の内容は、前期著作活動の方法論（諸著作の弁証法的構造と間接的伝達）についての説明と、前期・後期を通じた彼の著作活動の深層構造（懺悔者キェルケゴールのつぐないと自己否定としての著作活動、著作活動における摂理の働き、任務としての著作活動）についての説明となるはずであった。

もちろんキェルケゴールの心中には、著作活動の方法論や深層構造についても公にすべきではないかという考えがある*⁵¹。だから彼は「視点」を書くなどしたわけだが、他方で彼は、書き上げてある「視点」を読み返し、それを出版することにためらいを覚えるのである*⁵²。

そのためらいの要因は、一つには、「視点」では、著作活動の深層構造の十全な説明のためには弱すぎるのではないか、ということである。1849年2月上旬ころの日記に次のようにある。

そしてこれが決定的なことだ……。つまり、私は自分自身のことを完全に真実に提示することはできないのだ。[「視点」の] その最初の稿においても……。私は自分にとって最大のこと——私が懺悔者だということ——に強調を置くことができなかった。そしてそれこそが、私のことを最深の次元で説明することなのだ。

……この本 [「視点」] それ自体は真なるものだ。そして、私の考え方にとっては見事なものだ。だがこうしたたぐいのものは、私の死後にのみ出版されうる。……私はもちろん自分にとって決定的に重要なこと——私の罪と責め——とは何かについて言うことができないのだ。*⁵³

キェルケゴールにとって「最大のこと」、彼の実存を根源的に規定すること、すなわちキェルケゴールが懺悔者であること、そのことを十全に説明するには、当然ながら、例えば彼自身の具体的な罪や責めについても言及しなくてはならないはずである。だが周知のように「視点」にはその記述はない。その意味で「視点」では弱すぎるのである。

キェルケゴールが「視点」を出版することにためらいを覚える要因の二つ目

*⁵¹ 例えば、キェルケゴールは、1849年2月中旬の日記に「その創意を無限に神に負っている多産性を謎のままにしておくこと……が、[神との関係で]認められているのかどうか」(SKS 21, 275, NB10:37)と記している。

*⁵² 正確に言えば、キェルケゴールはこの時期、『完結の全集』のアイデアの妥当性について検討しつつ、それと並行して、「視点」を単体で出版する可能性も探っていたのであり、「視点」出版のためらいは、そうした思考の所産である。

*⁵³ SKS 21, 248-249, NB9:78.

は、一つ目とは逆に、「視点」は強すぎるのではないかということである。上述のように、「視点」には彼の具体的な罪や責めについての記述がなく、だからそれは著作活動の深層構造の十全な説明には弱すぎる。とはいえそれは、弱いながらも彼の罪や責めの存在をにおわせてしまっている。「視点」は、そのようなものとして、それを読む者に、彼の罪や責めについて詮索させてしまうだろう*54。その意味でキェルケゴールにとって「視点」は強すぎもするのである。付言すると、これら二つの要因の背後に見え隠れしている、自らの罪や責めについて隠匿しようとする性向が、キェルケゴールにおそらく終生支配的であり続けた「閉じこもり」(Indesluttethed)である*55。

「視点」出版のためらいの要因の三つ目は、キェルケゴールが、自分の著作活動は、摂理の導きによるものであり*56、そして自分自身にとっての教育でもあったと考えていることである。そのような著作活動であれば、その方法論について、まるでそれが自分の創意であるかのように説明を与えることなど、許されないのではないか*57——そう彼は考えている。

おもにこれら三つの要因から、キェルケゴールは、「視点」について、あるいは『完結の全集』第三巻について、その刊行に困難を覚え、「私は沈黙を保たなくてはならない」*58という結論を下すのである。

(2) 本名による出版に関して

キェルケゴールは、『完結の全集』に偽名の著者をあてがわず、本名(「S. キェルケゴール」)で出版するつもりだった。この点に関しても、キェルケゴールはやはり困難を覚えるようになる。キェルケゴールは、1849年1月中旬ごろの日記に、次のように書いている。

……だが注意されるべきは、「詩的に、権能なしに」ということだ。と

* 54 SKS 21, 275, 299, NB10:37, 82.

* 55 「閉じこもり」について、詳細は、拙編訳『キェルケゴールの日記』121-124頁参照。

* 56 SKS 21, 282, NB10:48.

* 57 Ibid.

* 58 SKS 21, 359, NB10:192.

いうのも、つねづね気をつけてきたことだが、私は使徒やそうした類の者として定められてはいないからだ。私は詩的・弁証法的な天才であり、宗教的そして個人的には懺悔者なのだ。……『完結の全集』を構成する] これらの作品には、いわば「裁き」が含まれている。それは、キリスト教界に対する裁きであり、ほかの人々と同じく私自身もその裁きを受けることになるのだ。だがまさにこのことによって、私が使徒やらそうした類の者と混同されることが防がれるだろう。詩的な見方をすれば、これらの作品はまるで使徒の手によるものようでありながら、使徒ではない私は脇によけているのである。それは結局、私は詩人であり、そして懺悔者であるということだ。^{*59}

『完結の全集』第一巻「死に至る病」と第二巻「キリスト教の修練」は、先述の通り、理想性の前面化をその内容とする。懺悔者であり詩人であるキェルケゴールは、理想を体現する使徒のような者ではなく^{*60}、むしろ理想性による裁きを受ける者の一人である。だからそれらの著作の出版にあたっては、キェルケゴールが「詩的に、権能なしに」その内容と関わっていることが明確化されねばならない。したがって『完結の全集』の著者を実名にするのは困難なことなのである。

(3) 著作活動から手を引くことに関して

キェルケゴールは、父が遺した膨大な財産のおかげで定職に就く必要がなく、『あれか、これか』の出版(1843年)以来作家として活動してきた。だが、1848年中ごろの宗教的転機以前から彼の財政はひっ迫するようになり^{*61}、生計のために公職(牧師や神学校の講師の職)に就こうかという考えが、宗教

^{* 59} SKS 21, 233, NB9:56.

^{* 60} SKS 21, 152, NB8:17.

^{* 61} Frithiof Brandt og Else Thorkelin, *Søren Kierkegaard og pengene*, 2. udg., København:Spektrum 1993 [1935], ss. 86-90.

的転機の時きも^{*62}、またその後も^{*63}、彼の心中にあり続ける。

先に確認したように、キェルケゴールは『完結の全集』の出版を最後に著作活動から手を引こうかと考えていたのだが、その考えは、生計の確保のために公職に就くという考えと結びついていたのである。早い話、キェルケゴールは、後期著作活動を『完結の全集』の出版によって一挙に終結させて著作活動からは手を引き、その後は生計の確保のために公職に就こうと考えたわけである。

キェルケゴールは、上述のように「視点」の出版の可否や「死に至る病」「キリスト教の修練」（を含む『完結の全集』）の実名での出版の是非について思い悩むのと並行して、生計と著作活動の緊張をめぐるこの問題についても思考を深める。彼は、『完結の全集』を出版し著作活動から手を引き公職に就くという可能性について、他の色々な可能性（『完結の全集』のアイデアは放棄した上で、作家をやめて公職を探し、すでに完成している「死に至る病」などの作品はその邪魔にならない形で少しずつ出版すること、など）^{*64}と並置させながら検討する^{*65}。その際の彼の思考の要点——これはキェルケゴールの著作活動の本質を捉えるにあたってきわめて重要な点であると思われるが——を伝えると思われるのが、1849年6月下旬に書かれた以下の日記である。

……もし私が今この瞬間に、そうでなくともできるだけ早く構えをとらないならば、そのとき私の作家の活動の全体的効果が失われてしまう。いくらかの時間を過ぎるにまかせ、そして（それがどれくらいの長さになるかは分からないが）牧師の職を求め、そしてそれから残りのものを少しずつ偽名で出版するのであれば、なおさらのことだ。そのとき決定的なものが完全に失われてしまうのだ。それはつまり、宗教的に支えられた、そ

^{*62} SKS 20, 357, NB4:152 et al.

^{*63} NB9:74, NB10:16, 39, 60, 67, 69, 78, 89, 192, 200, NB11:14, 20, 21, 35, 105, 114 et al.

^{*64} SKS 22, 68, 70-71, 75, 79, NB11:122, 123, 125, 132 et al.

^{*65} さらに言えば、キェルケゴールはこのころ、公職のあっせんを期待して、ミュンスター監督や文相マズヴィを訪問している（SKS 22, 116-117, NB11:193）。

れ自身に関係する作家の活動である*⁶⁶。決定的なものが、同時性が、完全に失われてしまう。そしてすべてがより無意味になってしまう——公職を手に入れるために、そして個人的な困難を避けるために。*⁶⁷

つまり、キェルケゴールの考えでは、懺悔者にとってのつぐないであり自己否定である彼の著作活動は、彼自身の実存を賭けたものでなくてはならないのである。具体的に言えば、理想性を前面化させることにより国教会の牧師をはじめとする多くの人々との対立が予想され、「真理を説くことと結び付いている苦悩へと自分を引き渡す」*⁶⁸はずの後期著作活動にあつては、その苦悩をわが身に引き受けそれに耐え抜くことが、作家キェルケゴールにとって「義務」なのである*⁶⁹。それこそが、懺悔者による、撰理により与えられた任務としての著作活動、「宗教的に支えられた、それ自身に関係する作家の活動」のあるべき姿なのだ*⁷⁰。言いかえれば、キェルケゴールにとって、生計の配慮を優先するあまり、苦悩もろとも著作活動を引き受けようとしなのは、「抜

*⁶⁶ 重要な箇所であると思われるので原文を記しておく。Det Definitive er saa aldeles tabt: en Forfatter-Virksomhed, der forholder sig til sig selv, religiøst understøttet.

*⁶⁷ SKS 22, 119, NB11:194.

*⁶⁸ SKS 22, 64, NB11:114.

*⁶⁹ Ibid.

*⁷⁰ キェルケゴールのこの認識が興味深い形で示される日記（1849年2月上旬）を、以下に引用しておく。

『教会新聞』[Kirketidende]（1849年2月2日号）にある、ビルケダール[Birkedahl]（1809-92）、デンマークの神学者、牧師]の説教についての一種の批評の中に、彼は国教会というものをまったく認めようとせず、説教の中で国教会と戦っているのだということが見てとれる。なんとすばらしい。ここにわれわれは混乱した現象の一つを見るわけだ。彼が認識すべきことはこれだ。彼がまずすべきことは、国教会の牧師としての地位を辞すこと、生計をあきらめることである。「そんなことをすれば生きてゆく手段がなくなってしまう」と彼があっさり答えるだろうということは、明白だ。そしてまた、彼が世間の人々みんなに理解してもらえようということも。世間の人々は生計に関することにはとても理解を示し、それで私が言っているようなことは取り越し苦労だと思われる。けれども、これこそがBが自分のためになすべきことであるということ、そうすれば彼は自分の確信がそのために犠牲を捧げるほどにまで堅固なものかどうか分かるだろうということに、疑いの余地はない。

け目ない」(klogt) こと^{*71}なのである。

かくして、キェルケゴールは、『完結の全集』を出版しておきながら、理想性を前面化させることがもたらす苦悩については引き受けずに、むしろ生計の確保のために公職に就くという道を、拒否することになる^{*72}。『完結の全集』のアイデアを断念し、『死に至る病』を印刷所に送った(6月29日)直後の日記で、彼は次のように述べている。

……事柄の全体はじつに単純だ。私は行為することを自分の義務だと見なし、神が私の手綱を握ってくださるようにできるようにすることを自分の義務だと見なしているのである——そのとき神は、その他のことについて、何とかしてくださるはずだ。

ああ、抜け目なさ [Klogskab] は危険な友だ。行為するのを先送りすること、自分のことを守ることは、じつにもっともらしく見えるものだ——そのとき人は安全なのだ。ああ、だが長い目で見れば、後で振り返ってみれば、より高い意味では、それは分別のないこと [uklogt] だったと、たぶん分かることだろう。^{*73}

結び

以上、本稿では、なぜキェルケゴールは『完結の全集』のアイデアを断念したのかについて、おもに当該時期の彼の日記(NB6からNB11)を資料として考察してきた。

『完結の全集』のアイデアの要点は、(1) その内容の総体性、(2) 本名による出版、(3) その出版を最後に著作活動から手を引くこと、の三つであると考

^{*71} SKS 21, 294, NB10:69, SKS 22, 15, NB11:14.

^{*72} ただし、この時期以降も、生計の問題はキェルケゴールの中にくすぶり続け、彼は公職に就くべきか否かという問いに繰り返し向き合い続ける(NB14:8, NB15:49, 90, NB16:42, NB17:44, 45, NB18:51, 92, NB20:51 et al.)。キェルケゴールが最終的に公職に就くことを断念し作家であり続ける決意をしたのは、おそらく、『キリスト教の修練』を印刷所へと送付する(1850年8月20日)直前、1850年8月上旬ころのこと(SKs 23, 441, NB20:85)と推察される。

^{*73} SKS 22, 126, NB11:203.

えられるが、上で確認してきたように、キェルケゴールはこれら三つのそれぞれに、最終的に困難を覚えるようになったのである。かくしてキェルケゴールは、『完結の全集』のアイデアを「絶望的」「悪魔的」*74と結論づけ、ひとまず『死に至る病』を、偽名著者「アンチ・クリマクス」をあてがい、出版したのである。

キェルケゴールが『完結の全集』のアイデアを断念した思考は、視点を変えれば、『死に至る病』の出版にこめられている意味としても捉えられるだろう。すなわち、『死に至る病』の出版は、キェルケゴールが、(1) 自らの罪や責めについては堅く口を閉ざしたまま、摂理が導く著作活動という任務を黙々と遂行し続けようとしていること、(2) 自分の立ち位置（「詩的に、権能なしに」）についてきわめて自覚的・明示的に、理想性の前面化という仕事を遂行しようとしていること、そして、(3) 懺悔者のつぐないであり自己否定としての著作活動に、抜け目ない仕方ではなく、おのれの実存を賭けて誠実に携わり続けようとしていることを、意味するのである。キェルケゴールは、このようにして、キリスト教の改正の試みである後期著作活動の第一歩を踏み出したのである。

* 74 SKS 22, 131, NB11:211.

Why Kierkegaard Abandoned the Idea of
“Fulfillment’s Complete Works,” or the Implications of
his Publishing *The Sickness unto Death*
-Reading NB6-NB11-

Yusuke SUZUKI

In early December of 1848, Kierkegaard conceived the idea of publishing a voluminous book “Fulfillment’s Complete Works”. However, in late June of the same year, he abandoned the idea: on the 29th, he sent off to the printer the manuscript of *The Sickness unto Death*, which was supposed to constitute “Fulfillment’s Complete Works,” and a few days later he said in his journal that it was “... a desperate idea and so too something of a demonic one” (NB11:211).

In this paper, I try to elucidate why Kierkegaard abandoned the idea of “Fulfillment’s Complete Works” by reading his journals NB6-NB11.

The main points of the idea are briefly summarized as follows: (1) Kierkegaard wanted to publish a comprehensive book containing *The Sickness unto Death*, *Practice in Christianity*, *The Point of View* and so on, (2) he wanted to do so not under a pseudonym but under his real name, and (3) he intended to put an end to his authorship with its publication. Kierkegaard came to find difficulties in these three points respectively, so that he abandoned the idea in the end.